イギリスの階級社会と英語

藤　森　あすか

1　はじめに

今日、英語を話す人の数は年々増加している。第一言語として英語を話す人はもちろんのこと、英語を公用語としている国があったり、第二言語として英語を使用する人がいたり、外国語として英語を学ぶ人がいたりと、もはや英語は世界の共通語だと言ってもそれを疑う人はいないだろう。

このように、現在多くの国や地域の人たちの間で話されている英語は、それぞれの国や地域の文化・社会と混ざり合いながら日々変化をとげている。それは英語の発祥の地であるイギリスにおいても例外ではない。地域による方言の差が非常に大きいイギリスでは、古くから容認発音が標準英語とされてきた。それにもかかわらず、容認発音を使用する人の数はイギリスの全人口のわずか3%にすぎなかった。これはイギリスに階級意識というものが、強く根付いていたからである。しかし、最近では、容認発音に取って代わる新たな標準英語として河口域英語が急速に広まってきている。いままでの容認発音が形だけの標準英語であったのに対して、河口域英語は地域や階級の壁を越え、広く話されるようになっている。河口域英語はイギリスにおける真の標準英語になりつつあるのである。

本稿では、現在イギリスで話されている英語を考察することによって、イギリスにおける言語と社会のつながりについて明らかにしていく。

2 イギリスで話されている英語

イギリスで話されている英語と聞くと、一つしかないように思うかもしれないが、実はイギリスの中にもいくつかの英語が存在している。日本においても、大阪の人が話す日本語は大阪弁、東北の人には東北訛りがある、というように住んでいる地域によって使用する日本語に違いが見られる。これと同様に、イギリスにおいても住んでいる地域による英語の違いが存在している。しかし、イギリスにはこの地域による英語の違いだけではない、社会階級による英語の違いというものも存在する。

2.1 地域による違い

イギリスで話されている英語には、地域によって様々な変種がある。イギリスを訪れる旅行者は、多種多様なアクセントに戸惑うことだろう。地理的・地勢的条件などの地域による言語の違いを地域方言と言うが、イギリスで使用されている英語は、発音、アクセント、言い回し、語彙等の面で他の国で使用されている英語よりも地域方言による差が大きい。ほんの少し離れた町同士でも発音が違っていて、他の英語圏の人でも理解しにくい方言も多い。

英語の発祥地であるイギリスの正式な名称は、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland（グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国）であり、その名の通り、国土はグレートブリテン島と、アイルランド海をへだてたアイルランド

島の北部（北アイルランド）、およびその周辺のいくつかの島からなる。また、グレート・ブリテン島は中部から南部を占めるイングランド、西部のウェールズ、北部のスコットランドに大別され、それぞれの地域でいくつかの方言が話されている。ここでイギリスにおける代表的な地域方言をいくつか挙げてみる。

まずアイルランド地方で話されている英語は、二つの変種に大別できる。イングランドから伝わってきた、ダブリン市内とその周辺地域で話されている南部アイルランド英語と、起源をスコットランドにおく北部アイルランド英語である。これらの英語の特徴は以下のようになる。

南部アイルランド英語の方言はイングランド英語の流れを汲んでいるので、例えば母音のシステムにしてもイングランド英語のものに近くなっている。ただ、アイルランド・アクセントは母音の後の‘r’を発音するので、pier, pair, poor などの語において中向き二重母音[1]を使うことはない。また、book, cook, rook などの語においても boot の母音と同一の長母音を用いることがある。その他には、語末に現れる /p/, /t/, /k/ を声門閉鎖音で置き換えずにはっきりと破裂させる、ということや、many, any の発音が penny と韻を踏むのではなく Annie と韻を踏む発音になる、という特徴がある。

一方、北部アイルランドの方言はスコットランド英語の流れを汲むので、一般的にスコットランド英語の発音の特徴を継承しているといえる。しかし、まったく違いがないわけではなく、例えば、スコットランド英語では cot に含まれる母音と caught に含まれる母音は同じだが、北部アイルランドの方言では、子音 /p/, /t/, /k/ の直前では区別する。したがって、cot と caught にはそれぞれ短母音と長母音が現れ、同音異義語にはならない。

スコットランド地方で話されている英語にはスコティッシュ・アクセントがある。スコットランドは、イングランドとは歴史も文化も違っていて、使用している言語にもはっきりとした特徴がある。スコティッシュ・アクセントでもっとも特徴的なものに、母音の後の‘r’を発音することが挙げられる。さらに、もうひとつの際立った特徴は、母音の「エイ」が「イー」と発音されることである。例えばMondayは「マンディー」と発音され、stationは「スティーション」といった具合に発音される。また、スコットランド・アクセントでは長母音と短母音との対立はない。したがって、すべての母音が本来的にはほぼ同じ長さということになる。ただ、実際的にはScottish Vowel Length Ruleと呼ばれる規則に基づいて変化している。規則というのは、ほぼすべての母音が子音/v/, /z/, /r/の直前で、あるいは語末において、長めになるというものである。たとえば、leadとleave、paleとpair、greedとagreeを比較すると、それぞれleave, pair, agreeの母音のほうが長くなる。

ウェールズ地方で話されている英語について述べると、ウェールズ・アクセントは東部や南西部の地域を除けば一般的に‘r’の発音をしないアクセントだと言える。また、sofaの‘a’やcondemnの‘o’などは曖昧母音と呼ばれ、はっきりとした特徴のない中性的な母音で発音されるが、ウェールズ・アクセントではそれぞれはっきりした音色の‘a’や‘o’になる。また、/p/, /t/, /k/の発音にあたっては一般的に破裂が強く、ウェールズ・アクセントではこれらの音が語末に現れる場合でも同様に強い破裂を聞くことができる。

イングランド地方で話されている英語は、北部方言と南部方言に大きく二分することができる。この二つの方言の特徴を比較しながら述べると次のようになる。

まず long の発音はイングランド北部では ‘lang’ となる。イングランド北部では long, wrong, throng などに含まれる母音は短い a になるからである。一方、イングランド南部では long はそのまま ‘long’ と発音される。次に but の発音について考えると、イングランド北部では ‘boott’ と発音し、イングランド南部では ‘but’ と発音する。これは、イングランド北部では could, cud, put, putt, come, some, fun などに含まれる母音は、皆同じように短い oo（日本語の「ウ」に近い）になるからである。イングランド南部においては、could, put の母音と cud, putt, come, some, fun の母音は異なっている。gate の発音は、イングランド北部では長い単一母音で発音され ‘geht’ となるが、南部では二重母音で発音されるので ‘gayt’ となる。

また、イングランド南部の方言に見られる特徴を付け加えると、語頭の ‘f’、‘s’、‘sh’ が ‘v’、‘z’、‘zh’ と発音される傾向があったり、old, oak などの語の語頭に、あるいは ‘oy’ に先立って、w 音が付加されて、wold, woak のような語が生まれたり、boys が bwoys になったりする傾向がある。

以上で述べたのが代表的な地方方言である。ここで紹介したのは数あるイギリスの地域方言の中のほんの一握りであって、大きく分けた地域方言の中にも、いくつかの方言が存在している。その中でも最も有名な方言に、ロンドンあるいはその近郊に住む労働者階級の方言として位置付けられているコックニーがある。コックニーの特徴についてはまた後で詳しく述べることとする。

2. 2 階級による違い

イギリスで話されている英語について考えるとき、地域方言のほかに階級方言があることを忘れてはいけない。この階級方言という

のは、上流階級や労働者階級など、属している社会階級によって話す英語に違いが見られるというものである。社会階級による違いを考えるためには、まずイギリスにおける階級とは何か明らかにする必要がある。

2. 2. 1　イギリスにおける階級

イギリスにおける階級とは何かということについて考えるとき、私たちが今まで階級として捉えていた概念は、イギリスにおける階級の概念とはまったく違うということを理解しなければならない。階級とは、イギリス以外の国では、経済的な区分として捉えられている。しかしイギリスにおける階級とは、単なる経済的観点からする人々の分類ではなく、家、学校、スポーツ、飲み物、ファッション、そしてスーパーに至るまで、生活のあらゆる領域において人々を区別しうる観念なのである。

イギリスの階級は大別すると上流階級・中流階級・労働者階級の三つに分類することができる。このうち中流階級は、さらに上層、中層、下層の三つに分けることができる。それぞれどのような人が上流階級・中流階級・労働者階級を構成しているかというと、まず上流階級は伝統的に仕事をしなくても食べていける人々からなる階級である。広大な領地と屋敷を持ち、土地を収入源としている貴族や大地主などがこれにあたる。それに対して、中流階級はなんらかの商売、あるいは職について収入を得る人々をさす。さらに、労働者階級とは、肉体労働者や職人からなる階級である。

これはイギリスにおける階級の伝統的な定義であるが、現在では事情が変わってきている。上流階級といえども会社を経営していたり、職についている人々もいれば、労働者階級を自認していても、会社勤めをしている人々もいる。

このように、イギリスにおける階級とは社会科学的な定義とは別で、純粋に収入では決められない、極めて文化的な背景からなるものである。また、このような階級間の線引きは非常に難しく、どのような特徴を取り上げて分類するのかといった基準がはっきりとされていないため、その境目はあまりにぼやけていて、うまく捉えることができない。ただ一つだけはっきりとしているのは、労働者階級がイギリス社会の半分以上を占めているということである。

2. 2. 2 容認発音[2]

容認発音（Received Pronunciation：RP）とは、イギリス英語の伝統的な事実上の標準発音のことで、世間にはイングランド南部の教養のある階級の発音、公共放送局の BBC のアナウンサーの発音（BBC English)、王族の発音（Queen's English）としても知られている。“Received” とは、「最上の社会に受け入れられる」という意味である。

もともと容認発音は、中世後期にロンドンを含むイングランド南東部から発達した。ビクトリア朝時代後期の 1870 年に、「正しい英語と読み、書き、算術を強化する」という意図の教育条例が公布され、各地から都市のパブリック・スクールに集められた上流階級の生徒たちの間で標準英語として話されたため、地方的なばらつきがない。

容認発音の特徴には（1）のようなものがある。

（1）

i．‘r’ を発音するのは次に母音が続く場合のみで、音節末の ‘r’ を発音する r 音化[3]はない[4]。

（例）car [kɑ]、hard [hɑ d]、born [bɔ n]、water [wɔ tə]

ii. ask, bath, chance など（後続の子音が「二字一音の摩擦音」「摩擦音＋破裂音」や「鼻音＋他の子音」であることが多いが、規則的ではない）の‘a’が非円唇後舌広母音（[ɑ]）となる。

iii. stop などの‘o’は円唇後舌広母音である［stɒp］
（例）stop の発音は「スタップ」（米）でなく「ストップ」（英）

iv. better など母音間・強勢後の‘t’は「ベター」とアメリカ英語よりもはっきり発音する。（アメリカ英語では歯茎はじき音[5]となる）

v. bluntness などの‘t’は声門閉鎖音［ʔ］になる。

vi. /ou/ を［oʊ］ではなく［əʊ］で発音する。［εʊ］のように聞こえることもある。

vii. new を［nju ］「ニュー」、tune を［tju n］「チューン」と発音する。（アメリカ英語では［nu ］「ヌー」、［tu n］「トゥーン」と発音する人が多い。）

viii. head など語頭の‘h’を発音する。

今なお容認発音が「イギリス英語の標準発音」と国際的に認識されていて、他の英語圏の人にも理解されやすいことから、自国外ではなるべく容認発音に近い英語を使おうとするイギリス人も少なくない。また容認発音自体の変化も進行していて、現在の BBC 放送の標準発音は 1950 年代の発音とは違っている。しかし 1960 年代以

降、BBC でも容認発音以外の発音が普通になるに従って、伝統的に容認発音を使用していた階級も若者の間ではその使用が失われる傾向にある。現在、容認発音の話者はイギリス人口の約 3%程度にまで減少した。

2. 2. 3　コックニー[6]

コックニーとは、ロンドンのイーストエンド地区、特にボウの鐘（Bow Bells：正式名 St. Mary-le-Bow）が聞こえる範囲内を出生とする人たちの話す英語で、古くはチョーサー時代（14・15 世紀）から使われていたと言われるロンドンの下町言葉である。1870 年に教育条例が公布されたが、コックニー話者が主として生活していたロンドンのイーストエンド地区は貧困のために教育改革の成果が出なかったため、コックニーには教育改革で根絶した英語の発音が残っている。

コックニーの特徴には（2）のようなものがある。

（2）

i．二重母音・長母音の発音が以下のようになる。

/eɪ/ が［aɪ］になる　（例）day［daɪ］
/i / が［əi］になる　（例）keep［kəip］
/aɪ/ が［ɒɪ］になる　（例）like［lɒɪk］
/ɔɪ/ が［oɪ］になる　（例）oil［oɪl］
/aʊ/ が［æ］になる　（例）town［tæ n］

ii．単語中の［h］を発音しない。不定冠詞は an となる[7]。

（例）half［a f］、a hand［ənænd］

iii. 無声歯摩擦音［θ］の‘th’を無声唇歯摩擦音［f］と発音。
（例）think［fɪŋk］

iv. 有声歯摩擦音［ð］の‘th’を有声唇歯摩擦音［v］と発音。
（例）father［fɑ və］

v. 語頭の有声歯摩擦音［ð］の‘th’は［d］と発音。
（例）this［dis］

vi. 音節末の‘t’をはっきり発音せず声門閉鎖音となる。
（例）water［wɔ ʔə］「ウォーッ・ア」、eight［eɪʔ］「エイッ」と息を飲み込むような形

vii. 音素 /r/ に歯茎接近音［ɹ］ではなく唇歯接近音［ʋ］を用いることもある。
（例）right［ʋɒɪt］

viii. 母音と母音の間に‘r’の挿入が行われることがある。
（例）America is → America-ris

ix. 強勢のない歯茎側面接近音［l］の円唇後舌母音・半母音化。
（例）little［lɪʔʊ］、able［aɪbɪ］

x. 語末の -ing が -in と発音される。
（例）running［rʌnɪn］、morning［mɔ nɪn］

またイギリス英語には日常会話の中で、俗に使われている押韻ス

ラング“Rhyming Slang”と呼ばれている隠語めいた言い回しがあるが、これはコックニーを起源とするものが多い。昔、果物や野菜、魚を荷車で売る行商人が違法に商売をするとき、暗号としてコックニーを使い始めたのが始まりである。〈表 1〉は押韻スラングをまとめたものである。

〈表 1〉を見てわかるように、押韻スラングでは本当に言いたいことを、その語と韻を踏む別の全く違う語に置き換えて表現してい

〈表 1〉

押韻スラング	意　味		使用例
Adam and Eve	信じること	Believe と Eve の押韻	I don't Adam and Eve it!
Bacon and Eggs	足	Legs と Eggs の押韻	She's got a nice set of Bacons.
Bangers and Mash	現金	Cash と Mash の押韻	You have to pay in bangers.
Butcher's hook	見ること	look と hook の押韻	Let me take a Butchers!
China plate	親友	mate と plate の押韻	How are you, me old China?
Dog and Bone	電話	phone →Dog and Bone	Get the dog for me.
Grass / supergrass	密告/密告者	Copper と Grass-hopper の押韻	I think he grassed me up.
Lady Godiva	£5	fiver と Godiva の押韻	Can I borrow a Lady Godiva?
Pete Tong	ダメになること	Wrong と Tong の押韻	It's all gone Pete Tong.
Tom and Dick	具合が悪い	sick と Dick の押韻	I'm feeling a bit Tom.

る。

2. 2. 4 語彙・言い回しの違い

社会階級による英語の違いを考えるとき、その違いが最も顕著に現れるのがアクセントである。しかし、アクセントだけではなく語彙にも社会階級による違いが見られる。同じものをさしているのに、階級によって全く違う単語を使っていたり、同じことを言うのにも違う言い回しをしたりする。〈表 2〉は上流階級の人たちが使う言葉と、非上流階級の人たちが使う言葉を比較したものである。

このように、社会階級が違うと語彙や言い回しがガラッと変わってしまう。上流階級の人々のほうがより直接的な表現を使うのに対し、非上流階級の人々は遠回しな表現を好む傾向がある。

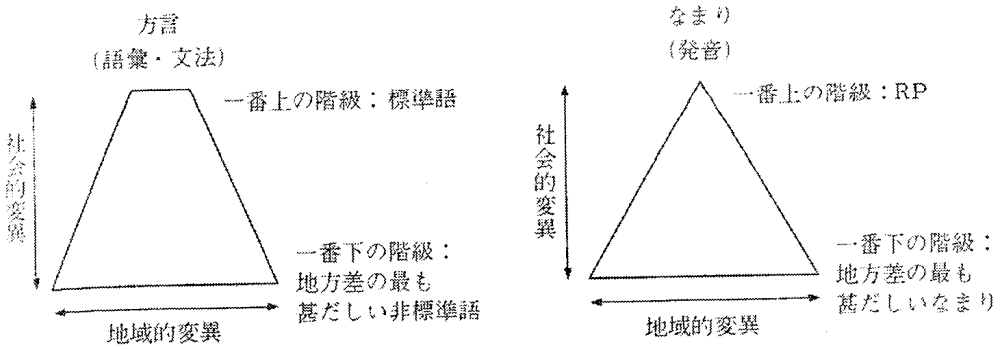
〈表 2〉

	上流階級	非上流階級
自転車	bike, bicycle	cycle
鏡	looking-glass	mirror
ラジオ	wireless	radio
食卓用ナプキン	table-napkin	serviette
トイレットペーパー	lavatory-paper	toilet-paper
ジャム	jam	preserve
贈り物	present	gift
家	house	home
裕福	rich	wealthy
野菜	Vegetables	Greens
聞き返す時	What?	Pardon?
妊娠している	pregnant	expecting
知りません	I don't know.	I couldn't say.

2. 3　地域方言と階級方言のまとめ

今まで見てきたように、イギリスには地域による英語の違いである地域方言と、階級による英語の違いである階級方言が存在している。〈図 1〉を見てわかるように、この二つの方言は階級を縦の軸に、地域を横の軸にしてピラミッド型で存在している。

〈図 1〉社会的・地域的言語変異



（田中・田中（1996：p 39）より）

最も上層の社会階級に属する人たちは、それより下層の階級に属する人たちに比べて、あらたまった場面やくだけた場面などあらゆる場面で、一般に標準変種を使用する割合が高い。この標準変種は、イギリスやアメリカのどの地域に行ってもほとんど違いがみられない。つまり、階級が上層になるほど、その階級方言に地域性が感じられなくなる。反対に、階級が下層の人たちほど、地域差の大きい非標準変種の訛りで話している。階級の最下層では、地域方言や訛りの変異が最も大きくなるのである（田中・田中 1996)。

3　河口域英語

最近、イギリスで、容認発音にとってかわって標準英語として浸

透してきている英語に河口域英語（Estuary English）がある。河口域英語とは、主にイングランド南東部の中流階級の人たちが話す英語を指し、1980年前後からロンドンとその周辺（テムズ川河口周辺）で使われるようになったことから、河口域英語と言われるようになった。河口域英語は、容認発音と呼ばれるイギリスの伝統的な標準英語と、ロンドンの労働者階級の方言であるコックニーとの中間に位置する、地域に特定されないある種の方言である。

最近では、テムズ川河口域に限らず、かなり広い範囲で、若者を中心に河口域英語が話されるようになっている。また、中級階級ばかりでなく、ブレア首相やBBCのアナウンサーなどのアクセントにも河口域英語の特徴がみられるようになり、階級を超えて広がっている。

3. 1 特徴

河口域英語の特徴には（3）のようなものがある。

（3）

i．語頭のtはより強く息を吐き出して発音される。

（例）take →「チェイク」、tell →「ツェウ」のように聞こえる

ii．子音の後のyの音が脱落する。

（例）news [nu z]

iii．二重母音・長母音の発音が異なっている。

/eɪ/ が [aɪ] になる　（例）day [daɪ]

/i / が [əi] になる　（例）keep [kəip]

/aɪ/ が [ɒɪ] になる　（例）like [lɒɪk]

/ɔɪ/ が［oɪ］になる　（例）oil［oɪl］
/aʊ/ が［æ ］になる　（例）town［tæ n］

iv．音節末のｔをはっきり発音せず声門閉鎖音となる。
（例）water［wɔ ʔə］「ウォーッ・ア」、eight［eɪʔ］「エイッ」と息を飲み込むような形

v．音素 /r/ に歯茎接近音［ɹ］ではなく唇歯接近音［ʋ］を用いることもある。
（例）right［ʋɒɪt］

vi．単語末の狭母音や半母音と次の単語の母音との間にｒが挿入される。
（例）America is → America-ris

vii．強勢のない歯茎側面接近音［l］の円唇後舌母音・半母音化。
（例）little［lɪʔʊ］、able［aɪbɪ］

このように河口域英語の特徴を見てみると、河口域英語はコックニーと非常によく似た特徴を共有していることがわかる。

3．2　河口域英語の使用者

河口域英語はコックニーとよく似た特徴を共有していることがわかったが、そうなると、河口域英語は単なるコックニーの変種に過ぎないのではないか、といった疑問がわいてくる。しかし、もし河口域英語がコックニーの変種に過ぎないのであれば、その使用者・話し手はロンドンの労働者階級の人たちに限定されるはずである。

現在、急速に広まっている河口域英語の話し手は労働者階級の人たちだけではない。本来であれば容認発音を話すはずの人たちでさえ、河口域英語を使用しているのである。したがって、河口域英語はコックニーの変種ではなく、容認発音とコックニーの中間の新しい英語として位置づけられるのである。

河口域英語は、1980年前後からロンドンとテムズ川河口周辺で使われるようになった、まだまだ新しい英語である。しかしながら、現在河口域英語の使用者は、北はノリッジ、西はコーンウォールの端までと拡大し、広大な領域で河口域英語を耳にすることができる。〈図2〉は現在河口域英語が話されている地域を示したものであるが、この図を見ても、どれだけ広い範囲で河口域英語が話されているかを知ることができる。

〈図2〉河口域英語が話されている地域

（田中・田中（1996：p 136）より）
注：EEが話されている地域は上の図の中で　　で示した部分。

3. 3　河口域英語はなぜ広まったのか

現在、多くの地域で話されている河口域英語だが、このように急速に広まっていったのはなぜだろうか。

要因の一つとして考えられるのは、イギリスの生産設備の近代化やハイテク化にともない、肉体労働者を必要としていた産業部門が、知的労働者を必要とするようになり、労働者階級が新中流階級へと

〈表 3〉イギリスの全国紙

	新聞紙名（英語名，創刊年）	平均発行部数（1月～6月） 1990年	2000年
日刊新聞	〈大衆紙〉		
	デイリー・ミラー（*Daily Mirror*, 1903）	3,106,000	2,263,000
	デイリー・スター（*Daily Star*, 1978）	916,000	613,000
	サン（*Sun*, 1964）	3,896,000	3,569,000
		計 **7,918,000**	**6,445,000**
	〈中級紙〉		
	デイリー・メイル（*Daily Mail*, 1896）	1,689,000	2,387,000
	エクスプレス（*Express*, 1900）	1,574,000	1,062,000
		計 **3,263,000**	**3,449,000**
	〈高級紙〉		
	ファイナンシャル・タイムズ（*Financial Times*, 1888）	291,000	459,000
	デイリー・テレグラフ（*Daily Telegraph*, 1855）	1,081,000	1,031,000
	ガーディアン（*Guardian*, 1821）	427,000	395,000
	インディペンデント（*Independent*, 1986）	413,000	224,000
	タイムズ（*Times*, 1785）	426,000	722,000
		計 **2,638,000**	**2,831,000**
日曜新聞	〈大衆紙〉		
	ニューズ・オブ・ザ・ワールド（*News of the World*, 1843）	5,046,000	4,023,000
	サンデー・ミラー（*Sunday Mirror*, 1963）	2,902,000	1,927,000
	ピープル（*People*, 1881）	2,577,000	1,523,000
		計 **10,525,000**	**7,473,000**
	〈中級紙〉		
	メイル・オン・サンデー（*Mail on Sunday*, 1982）	1,896,000	2,998,000
	サンデー・エクスプレス（*Sunday Express*, 1918）	1,696,000	974,000
		計 **3,592,000**	**3,972,000**
	〈高級紙〉		
	サンデー・テレグラフ（*Sunday Telegraph*, 1961）	590,000	808,000
	オブザーヴァー（*Observer*, 1791）	559,000	417,000
	サンデー・タイムズ（*Sunday Times*, 1822）	1,176,000	1,360,000
		計 **2,325,000**	**2,585,000**

変質してきていることである。中流階級が増えてきているという事実は、〈表3〉のイギリスの全国紙の平均発行部数の推移を見ても明らかである。

この表で、ここ10年間のイギリスの全国紙の発行部数の推移をみると、日刊新聞、日曜新聞ともに大衆紙の発行部数が減少しているのがわかる。その一方で、中級紙、高級紙のカテゴリーは全体として読者数を拡大しつつある。労働者階級から中流階級へと変質してきた人たちは、今まで彼らが使用してきた地域方言ではなく、容認発音とコックニーとの中間に位置する河口域英語を使用することによって、中流階級としての地位を確立しようとしているのである。また、最近ではイギリスの教育制度も変わり、誰でも奨学金で大学に行けるようになったので、お金がなくても学ぶ意志さえあれば学位が取れる。すると、上昇志向のある若者は言葉の面だけでも社会階級を上がることによって、より良い職業を目指そうとするのである。

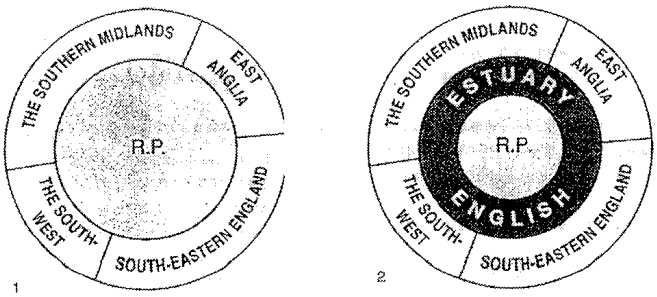
本来ならば容認発音を使用するはずの上流階級の人たちが河口域英語を話すようになってきているのは、心情的に労働者階級の人たちに少しでも近づこうとする意識が働いているからだと言える。また、政治家やアナウンサーにしてみれば、容認発音を使用して気取っていると思われるより、河口域英語を話して近づきやすい人だと思われたほうが、都合がいいのである。

4 おわりに

イギリスの人たちは、河口域英語という新しい英語を通して、自分たちより上あるいは下の社会階級の人たちに近づこうとしている。この現象は、イギリス英語がかつての容認発音—地域方言という二

層構造（図 3.1）から、容認発音―河口域英語―地域方言からなる三層構造（図 3.2）へ変化していることを示唆していると言える。

〈図 3〉イギリス英語の階級構造の変化



（菅山（2005：p 142）より）

現在イギリスで急速な広がりを見せ、真の標準英語になりつつある河口域英語は、長い間根付いていた階級意識がだんだんと薄れてきて、階級のない社会へと変貌をとげている最中であるイギリス社会を反映している。今はまだイギリス全土で河口域英語の使用を確認することはできないが、数年後にはイギリスのどこへ行っても河口域英語を聞くことができるようになっているだろう。いままでは同じイギリス国民同士でも方言のせいでコミュニケーションをとることが困難な場合があったが、河口域英語がイギリス全土に浸透すればそういった人たちもコミュニケーションがとれるようになる。河口域英語が名実ともにイギリスの標準英語だと呼ばれる日が来るのが楽しみである。

注

1　主音から副音に移行するとき、舌の位置が /ə/ に向かうもの。/ɪə/、/ɛə/、/ɔə/、/ʊə/ の 4 種類がある。中央母音の /ə/ の方向に向かって集中するので中向き二重母音と呼ばれる。

2　ウィキペディアの容認発音
〈http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%B9%E8%AA%8D%E7%99%BA%E9%9F%B3〉を参考に記述。

3　母音を調音する際に舌尖を反らせたり、舌を盛り上げたりすると、咽頭に狭めができてｒ音のような音色を備える。これをｒ音化といい、ｒ音性の母音ができる。

4　'for a long time' など後ろに母音が続く場合は連音化（リエゾン）を起こしｒを発音する。

5　子音の種類の一つ。舌端で歯茎を軽く弾くことによって生じる音。国際音声字母では［ɾ］と書く。

6　ウィキペディアのコックニー
〈http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%8B%E3%83%BC〉を参考に記述。

7　コックニー発音を矯正しようという意識のある話者は逆に［h］を不要なところに付加してしまうケースもある。（例）hardly ever［hɑ dli hevə］

参考文献

小野茂（1982）「英国社会階層と言語表現」
黒岩徹・岩田託子　編（2007）「イギリス」河出書房新社
小泉博一・飯田操・桂山康司　編（2004）「イギリス文化を学ぶ人のために」世界思想社
近藤久雄・細川祐子　編（2003）「イギリスを知るための 65 章」明石書店
菅山謙正　編（2005）「変容する英語」世界思想社
田中春美・田中幸子　編（1996）「社会言語学への招待」ミネルヴァ書房
梁田憲之・橋本尚江　編（1998）「イギリス文化への招待」北星堂書店
渡辺幸一（2006）「英国のバランス　日本の傾斜」河出書房新社
http://www.amelia.ne.jp/user/reading/dialect_top.jsp
http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/goken_news/pdfs/No11.pdf#search='河口域英語%20 語彙'
http://www.news-digest.co.uk/news/content/view/520/120/

http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/rosew94.htm
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%B9%E8%AA%8D%E7%99%BA%E9%9F%B3
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%83%E3%82%AF%E3%83%8B%E3%83%BC